

# 『古今和歌集』 仮名序の真価を探る ——「六義」と「歌のさま」の問題を中心に——

大野 ロベルト

## I. はじめに

『古今和歌集』は日本初の和歌の勅撰集である。漢字から仮名への過渡期にあった万葉仮名のみによる表記という大きな制約を抱えた『万葉集』から約一世紀半を経て、『古今集』は905年に、四人の撰者によって編纂され世に問われた。それは初の仮名による和歌集、しかも天皇の勅命による公式の集として、その後の文学の形成を大きく左右したと言える。

そのように重要な和歌集であってみれば、当然『古今集』は研究対象として頻繁に取り上げられ、個々の和歌はもちろん、それぞれの歌の作者や撰者について、あるいは二十卷からなる部立について、様々な考察が行われてきた。本稿の主題である仮名序と真名序という二つの序文についても、例にもれず幾度となく言及がされてきた。だが先行研究には、二つの傾向があるように思える。第一には包括的に、仮名序を真名序と合わせて一つの序文として捉える方法がある。この場合には、片や仮名、片や漢文という両者の明確な差異には触れながらも、その差異が何を意味するのかという問題そのものにまで踏み込む例は少ないような印象を受ける。具体的に言えば、仮名序の有名な書き出しや、『古今集』の編纂過程を説明する真名序の末尾の部分が引用されることが圧倒的に多く、全体的な比較や、『古今集』においてこれらの序文が果たす機能についての論は少ない。そして第二には、仮名序か真名序のどちらかのみを議論の俎上にのせるものがある。この場合には、題材が真名序であればその淵源になっている中国の詩論との比較が行われ、仮名序であれば歌論の嚆矢としての性質が問われる、という具合であり、取り上げられないほうの序文は無くもがななものとして扱われることも少なくない<sup>1)</sup>。

本稿では『古今集』の両序を改めて比較した上で、仮名序こそ『古今集』の実際的な序文ではあるが、その機能を十分に理解するためには真名序の存在も不可欠である、ということをも主張したい。そして中でも、仮名序と真名序の大きな差異として認識されることの多い「六義」の問題に焦点を当てることで、和歌を日本独自の修辞理論に根付かせようとした仮名序の本質的な価値を浮き彫りにしたい。

## II. 『古今集』以前の序文

『古今集』の両序は当然ながらそれ以前の伝統を踏まえて記されたものであり、また、その伝統から故意に逸脱するものでもある。このことを明らかにするために、まずは『古今

集』以前の序文の来し方を概観する必要があるだろう。

言うまでもなく序文は中国文化の伝統に属しており、律令制の一環として日本に入った。当時の日本の政治的場面でしばしば論拠として言及された『史記』や、公的な文学である漢詩に模範を提供した『詩経』などは、いずれも序文を持つ。それらの序文はテキストの来歴を正当化するとともに、時の指導者にも敬意を払うものである。少なくとも中国の文化圏において、序文には読者への内容の予告や注釈という役割の他に、政治的な側面もあった<sup>2)</sup>。

さて、日本では『古今集』のまえに、三つの勅撰漢詩集が出ている。『凌雲集』（814年）『文華秀麗集』（818年）『経国集』（827年）である。また勅撰ではないが、これらより前に『懐風藻』（751年）も存在する。

中国南北朝時代の詩文集『文選』の序によるところが大きいとされる『懐風藻』の序は、基本的に、「神武天皇が開いた日本の国に朝鮮半島を経由して中国の文学が輸入され、やがて日本の人々も広く漢詩を作るようになった」という歴史的な説明に割かれている。そして天智天皇の時代から最近までの歌を収録した旨が記され、「将に先哲の遺風を忘れずあらむが為」に、この集は編まれたのだと説く（引用は訓み下し文。岩波書店刊行の日本古典文学大系による）。つまり『懐風藻』序では、日本の漢詩が完全に中国のそれに端を発するものと定義され、日本人もここまで漢詩を作るようになったのだ、とでも言うように、律令制の枠内でいかに日本文化が成熟しえたかを証明しようという意図が見られる。故にこの序には日本独自の詩法の萌芽を認めるそぶりはないし、すこしあとに成立することになる『万葉集』を予告するような、和歌への言及もない。

これが初の勅撰漢詩集である『凌雲集』になれば、すこしは日本独自の漢詩に対する情熱のようなものが見られるのではないか、という期待が膨らむかもしれない。だが事實は逆で、『凌雲集』序は簡潔極まりないものである。編者の一人である小野岑守によるそれは、冒頭で文帝（曹丕。魏王朝初代皇帝。在位 220-226）が自ら撰じた『論典論文』から「文章者経国之大業。不朽之盛事」（文学の研究や管理は帝王の事業である。決して廃れることはない）という言葉を引き、それが勅撰集の本質であることを明瞭化した上で、「撰集近代以来篇什」（近年の漢詩を集めた）という単純な編集方針を述べるだけの、ごく短いものである（引用は国民図書刊行の日本文学大系による）。文帝の言葉を借りての漢詩の賛美こそ行われているものの、「嵯峨天皇の命により、日本の国家事業として、日本人による漢詩を編む」という現実をとくに喜んでいるような様子はない。公的には和歌より遥かに重要視されていたはずの漢詩の集でありながら、詩を作ることの意義や知的興奮が語られるでもなく、あくまで政教的な事業の一端として、淡々と詩作・編纂がこなされている印象である。

そして『文華秀麗集』と『経国集』についても事情は大差ない。いずれも前代の勅撰集に言及し、「その集に入らなかった詩などを集めた」という意味の言葉によって勅撰漢詩集としての伝統を継承してはいるが、撰者の名前と官位、役職、作者や収録した詩の数を述べるのがせいぜいで、非常に事務的な、官僚的な序文と言わざるを得ない。中でも『経国集』は

まさに「経国之大業」という言葉を地で行くものであって、二十の部立に整頓された漢詩の数もそれまでより多く、言ってみれば国産漢詩の最高到達点を記念すべき集であるにもかかわらず、それについてことほぐでもない。結局、勅撰集ではない『懐風藻』の序だけが、控えめとはいえまだしも漢詩の歴史や意義に素直な文学的関心を払い、日本人による漢詩の発展を誇っているように思われる。

要するにここまで挙げて四つの漢詩集を見るかぎり、後の三つの序文は、まさに勅撰集であるという理由のために、形式的な、何ごとをも主張しない体のもとなっているようだ。それはテキストに関する最低限の説明と、依頼者であり最大の批評者である天皇への政治的儀礼だけを果たす、半ば空洞化した序文である。このことは、漢詩が結局は中国文化からの借り物であり、政治や教養といった社会的命題と切り離しがたい表現媒体であったことと無関係ではないだろう。漢詩は受け継ぐべきもの、守るべきものであった。詩人に求められたのは伝統的なシステムの知悉であり、表現に改革をもたらすことではなかった。詩を作るということが、『史記』や『漢書』を諳んじることよりも重要視されることはおそらくなかったのである<sup>3)</sup>。

それでも『懐風藻』序が後続の三つの勅撰詩集のそれより情熱的な語調で書かれていることは、さらに一考に値する。『懐風藻』は現存する最古の漢詩集であり、つまり、日本で漢詩をまとめる最初の試みであった蓋然性が高い。なるほど漢詩は中国では太古から存在し、彼地ですでに多くの集が編まれている。だが今回の撰者（淡海三船が有力である）は日本人である。そしていくら撰者が漢文の教養を積んでいるところで（とくに三船は、かつて僧侶であった）、彼はふだん日本語で物を考えていたはずである。初めて「外国語」の詩集を編み、そこに「外国語」で序をつけるという試みは、それだけで並々ならぬ模索を強いたはずだ。しかし『懐風藻』は勅命による事業ではないから、社会的なプレッシャーはそれほど強くなかったはずで、むしろ模索がよい結果を生んだと考えられる。だからこそ『懐風藻』序にはある種の伸びやかさがあるのではないだろうか。

このように、テキストが外国語で書かれているという問題と、それが国家事業として設定されたものであるか否かという点は、例えば『古事記』と『日本書紀』に結びつけて考えることもできる。『古事記』（712年）は日本初の歴史書であった。編纂の背景には天武天皇がいるが、勅命があったわけではない。つまり『懐風藻』に近いものと言える。一方の『日本書紀』（720年）は初の勅撰の歴史書であり、六国史の嚆矢としての権威を帯びることになる。こちらは、『凌雲集』になぞらえることができる。

『古事記』の序文は、これを献上した太安万侶の模索と情熱を物語っている。外国語である漢文で、いかに日本について語るべきか。苦悩を経て、安万侶はより日本語に適合しやすい変体漢文と、固有名詞を記す際に効率のよい音訓交用の記述を併せて利用することを思いついた。まだ仮名のない時代、これは日本語表記の発展にとって重要な一歩である。これに対して『日本書紀』には序文がなく、その文体には日本化されている部分もあるものの、基

本的には中国でも正式に通用する純漢文が用いられている。そもそも執筆者の中にも渡来人がいたとされ、その意味で『日本書紀』以来の勅撰の歴史書は、国家としての実力を中国の読者に示すという目的をも併せ持つ、国際的な史書であると言える<sup>4)</sup>。

では『古今集』の場合はどうか。それは日本語による和歌の集でありながら勅撰という権威を持つ、前例のないテキストであった。これまでに挙げた漢詩集のいずれとも比較にならないほど饒舌な序文が、しかも漢文と仮名の二種類で付されていることは、それだけ『古今集』が期待と情熱をもって編纂されたことを端的に示しているように思われる。だが、二種類の序文を付すことの必然性とは何だったのか。それぞれの序文の役割とは何だったのだろうか。次節では両序の比較を通して、この問題に光を当てることにしたい。

### III. 『古今和歌集』両序の比較

周知の通り仮名序と真名序の文章は、意味の面で多く重複している。しかし内容を同じくしているとされる文でも表現が大きく異なることが少なくないので、その差異を度外視することはできない。またそれ以上に、仮名序にしかない文、真名序にしかない文を検討することで、それぞれの序文の役割が見えてくるはずだ。以下、仮名序と真名序を三つの部分に分けて分析してみる。

#### a. 冒頭部分

広く流布している定家本を含めて、仮名序の多くの古写本には「仮名序」の題字はなく、紀貫之によるものであることが定説となつてはいるものの、筆者の署名もない<sup>5)</sup>。一方の真名序は逆で、多くの場合「古今和歌集序」の題と、紀淑望の名が記されている。これは、おそらくはじめからそうであったと考えられる。先走りになるが、序文という公的な、中国的な性質を多分に持ったテキストを仮名に書き換えるという逸脱が仮名序の本質である以上、題字や筆者という序文につきものの情報はここには必要ない。これから見るように仮名序の文体と内容はきわめて柔軟で、あたかも長歌とでも呼ぶべきものだ。そしてこの長歌は「よみ人知らず」なのである。

さて有名な第一文は、仮名序と真名序でわずかに異なっており、それぞれの特徴がよく現れている（以下、両序の引用は小学館刊行の新編日本古典文学全集による）。

やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。

（仮名序）

夫れ和歌は、其の根を心地に託け、其の花を詞林に発くものなり。

（真名序、訓み下し文）

確かにこの二つの文は、基本的に同じことを言っている。和歌は人間の心から出発し、言葉

として花開くものであるという、人と心と言葉を結ぶ、植物的な比喩による宣言である。しかし表現はだいぶ違う。仮名序と真名序の表現上の差異はすでに細かく整理されている<sup>6)</sup>。だがその差異の意味するところは、まだ十分に踏み込んだ議論がなされていないのが現状である。

「やまとうた」という言葉はこの仮名序が初出とされるが、その後あまり定着しなかった。日本の歌という意味を当然ふくんでいる「和歌」をさらに日本風を読み替えた、二重の和語化とも言えるこの語は、漢詩たる「唐歌」に対抗する姿勢を強調するものだろう。まして序文の最初にそれを掲げることは、この歌集が徹底して日本独自のものであることを読者に認めさせようという意図の現れではないだろうか。対して「和歌」は、この時代にはまだ「倭歌」とも書かれていた。「倭」も当然日本を指すが、それは中国文化圏から見た日本を指す言葉であり、日本も受動的にそれを名乗っていたにすぎない。ところが八世紀の初め頃から、日本は「日本」になる。『古今集』が準備された時代には、宇多天皇に取り立てられた菅原道真が遣唐使派遣を廃止し、律令制もあくまで国内の制度として守られて行くことになった。もちろん漢詩、漢文とその背景にある大陸文化はそれから重要視されたが、それは現に西方にある国家としての中国ではなく、一つの模範としての中国、古典のよりどころとしての中国であったろう。つまり真名序における「和歌」からは、中国文化の影響下にある日本という国の歌、という意味合いが、わずかであれ嗅ぎ取れるのである。だからこそ仮名序は、「やまとうた」という少々突飛な表現を持ち出してまでこれに対抗したのではないか。

次の句に移ると、仮名序では「人の心を種として」、真名序では「其の根を心地に託け」という表現が用いられている。ほとんど同じに見えるが、仮名序における「種」という語は「心」にかかっており、真名序における和歌の「根」が「心地」にあるという表現よりもいっそう肉体的であり、心というものの重要性をさらに高めている。また「心地」が心を大地に例えた仏教語であることを考えると、ここでも仮名序では日本独自の表現が追求されていると思われる。

最後の句についても同様のことが言えるだろう。仮名序の「万の言の葉とぞなれりける」では「言の葉」すなわち言葉そのものが植物であり、「種」である「人の心」と直結しているのに対して、真名序の「其の花を詞林に発くものなり」における「花」はあくまで抽象的である。その「花」が到達する「詞林」は、明らかに中国文化の範疇にある。詞林とは詩文集であり、七世紀に唐で成立した勅撰漢詩文集『文館詞林』に代表されるように、本来は漢詩の集を意味する。また「言の葉」は「やまとうた」同様に新しい言葉であり、言葉のみならずその組み合わせによって生れる和歌そのものをも指し、現代的な言い方をすれば詩的言語の存在を規定するものである。葉のように生い茂り、折り重なる言葉としての「言の葉」は、言うまでもなく日本文学の根底にある重要な概念であろう<sup>7)</sup>。

このように冒頭部分を比較するだけでも、両序が異なる志向性を持つことは明らかだ。真名序は、日本独自の文学たる和歌を称揚しながらも、それを中国文化を参考に組立てられた

公的な文学のシステム、つまり漢字漢文に支えられた古典的教養のシステムに結びつけながら論を進めている。それは当然のことで、仮名の文学である和歌に特化した初めての勅撰和歌集の序文にはそれくらいの慎重さがなければならないし、そもそも序文を付し、来歴を明記することである権威を発生させようという行為そのものが、大陸的な発想なのである。それに対して仮名序は日本語の可能性を活かした仮名で日本独自の文学論を展開し、中国経由の古典教養の魅力的な部分は吸収しつつも、可能な限り日本らしさを優先し、仮名で書かれた勅撰集にふさわしい序文を付そうという決意に溢れている。言うなれば、真名序がきちんと序文の優等生の役をこなしてくれるおかげで、仮名序は気ままにふるまうことができる、ということになる。まさにこれこそ、『古今集』に二つの序文が共存する理由と言えるだろう。

## b. 和歌の歴史

和歌の歴史を論じる部分は、両者の特徴を最も簡明に示す箇所と言える。同じ集の序文である以上、歌の歴史やその意義についての考察は、仮名序と真名序でほとんど一致している。しかし内容が近いだけに、両者の語り口の相違がより対照的に現れていることも事実である。

両序で説かれている和歌の歴史は次のようなものである。いまでこそ人々は表面的な美しさにとらわれ、中身のない歌を詠んでいるが、かつてはそうではなかった。代々の天皇はことあるごとに歌を詠ませ、歌人たちはそのときどきの自然の風景に心情を反映させるすばらしい歌を作った。とくに柿本人麿と山部赤人は抜きん出た名人であった。しかしそれから百余年、歌は衰微した。過去の優れた歌を研究し、自身も立派な歌を詠むような人間は数えるほどしかない。僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主らは、いずれも優れた歌人ではあるが、短所もある。それでも、数えきれないほどいる歌人のなかで、彼らのように歌の何たるかを理解している者はほとんどいない。

これが両序の述べる歌の歴史であるが、その手厳しさはかなり挑発的であると共に、『古今集』を以て和歌を再興しようという強い意志の現れとも取れる。『万葉集』で高みに達した和歌はやがて衰えたが、数人の歌人によってその神髄は何とか後世にも伝わった。そしていま『古今集』で、自分たちはもう一度和歌の芸術を花開かせようと欲する、というのがこの部分の主張である。

では次に、両序の細かな差異を見てみよう。まず、六歌仙の紹介に先立ち、近ごろでは立派な歌人がいない、という部分だが、仮名序では、

いまのことをいふに、官位高き人をばたやすきやうなれば入れず。

とし、尊い身分にあった歌人には触れないと述べている。これは皮肉とも取れる。確かに六

歌仙の面々は、天皇の孫である業平や遍照のように血筋は優れていても、政治的には大成を見ていない。しかし彼らこそ優れた歌詠みであり、他の人々よりも高く評価されているのである。

上記の一文に相当するとされる真名序の文は、『古今集』の編纂過程について語る部分に入ってから登場するのだが、議論の都合上ここに挙げよう。

風流は野宰相の如く、雅情は在納言の如しといへども、皆他才を以ちて聞え、斯の道を以ちて顕はれず。

野宰相は小野篁、在納言は業平の兄である在原行平で、前者は従三位、後者は正三位までのほりつめ、共に公卿であった。まさに「官位高き人」なのだが、その二人に対して、真名序は「皆他才を以ちて聞え、斯の道を以ちて顕はれず」と言い放っている。彼らはまず政治家であり、漢詩文の詩人であって、和歌の腕前で有名になったわけではない、ということである。これは真名序が漢文で書かれていること、つまり表面上は律令制に則り書かれていることを考えると興味深い矛盾である<sup>8)</sup>。

真名序と仮名序に共通する高官への一種冷笑的な態度は、撰者たちの立場とも深い関係があるだろう。紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人はいずれも政治的には低い身分に甘んじた。しかし彼らは寛平・昌泰・延喜という比較的平和な時代に、宇多・醍醐という文学愛好家の帝のすぐ近くで、身分を越えて歌の腕を磨いてきたのである。政治的には無名であっても、古来の知恵を活かし、優れた和歌を残すことこそ尊い使命である。そのような撰者の意識がこの部分には色濃く現れている。真名序にしか存在しない以下の一文も、そのことを裏付けている。

俗人争ひて栄利を事として、和歌を詠ずることを用ゐず。悲しき哉、悲しき哉。貴きことは相将を兼ね、富めることは金銭を余せりといへども、骨の未だ土中に腐ちざるに、名は先だちて世上に滅えぬ。適後世に知らるる者は、唯和歌の人のみ。

栄誉や富は本当に重要なのかという倫理的な問を立て、後世に名を残すことこそ有意義なのだという歴史主義的とも言えるこの意見には、人の道を中心とする漢学の命題とも通じるどころがあり、真名序に記載されるにふさわしいように思われる。

一方、仮名序にしかない次の一文は、おそらく仮名序の全体を通じて最も美しいものの一つである。

しかあるのみにあらず、さざれ石にたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、よろこび身に過ぎ、たのしび心に余り、富士の煙によそへて人を恋ひ、松虫の音に友をしのび、高砂・

住の江の松も相生のやうに覚え、男山の昔を思ひ出でて、女郎花のひとつきをくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。また、春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは、年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見てわが身を驚き、あるは、昨日は栄えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、暁の鳴の羽搔きを数へ、あるは、呉竹の憂き節を人にいひ、吉野河をひきて世の中を恨みきつるに、今は富士の山も煙立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

以上は、人々がいかに感情や風景を歌に表現し心を慰めたかという説明であり、真名序が「和歌を詠ずることを用ゐず」と評価した、和歌が衰微した時代の人々と対照をなしている。しかし、上記の説明には何かにつけ歌を詠んだという過去の人々ばかりではなく、彼らの意志を継いだ最近の歌人たちも含まれているのだろう。

事実、「筑波山」などの歌枕、「富士」や「松」など豊富な歌詞を盛り込んだこの一文に登場する表現は、いずれも『古今集』の中に実際に見出すことができる。つまりこの箇所は本編の予告、あるいはダイジェストという機能を有していると同時に、和歌が隆盛した時代に比しても遜色のない豊かな詩情がこの集には収められている、という高らかな宣言ともなっている。また、「たとへ」「かけて」「よそへて」「覚え」「思ひ出でて」などの言葉は、このような状況や感情はこのような情景にむすびつけて詠むものだ、という技巧の解説書としての性格をも伴っており、きわめて多層的で無駄のない記述となっている。これは当然、和歌とおなじ仮名で書かれた仮名序でなければ不可能である。

このように和歌の歴史に関する部分では、真名序と仮名序の内容は大筋で一致しているものの、異なる部分においては、それぞれ漢文と仮名文の性質を生かした表現や、それにふさわしい内容を選んでいることがわかった。また一方で、漢文で書かれた真名序が、必ずしも律令制の思想に忠実に従い、伝統や身分の高低に絶対の権威を認めているわけではないこともわかった。

### c. 『古今和歌集』の編纂

両序が最後に扱う『古今集』の編纂過程も、前項で取り上げた和歌の歴史の箇所以上に『古今集』の実体に関わる部分だけに、当然、大きな隔たりはない。しかし看過できない差異もある。まず、大まかな内容は以下の通りである。

今上天皇、つまり編纂の勅命を下した醍醐天皇が世を治めて九年が経った。忙しい政務の合間にも、天皇は和歌の大切さを忘れず、古い歌と現代の歌、その両方を収めた歌集を作るよう命じた。編纂の任に当たったのは、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑である。四人は過去の歌や自分たちの歌を集め、二十巻に分類した。この和歌集の編纂に関われたこと

は幸いである。人麿はすでに没したが、その和歌はまだ残っている。

以上が両序に共通する内容だが、やはりここでも、真名序にはどちらかと言うと政治的な傾向があり、仮名序には『古今集』そのものの重要性を示唆する傾向がある。

まず真名序では、編纂には二段階あったことになっており、最初は『続万葉集』という和歌集が編まれたが、そこで「重ねて詔ありて」、二十巻への分類を行い、最終的に『古今集』が成ったとする。この箇所冒頭には、

昔、平城天子、侍臣に詔して万葉集を撰ばしむ。

とあり、『万葉集』は平城天皇の勅命で編まれた勅撰集であるという認識を示している。その直後に『続万葉集』という書名を登場させることによって、『古今集』はすでに存在する勅撰集の伝統に根ざしたものの、という主張の裏付けとして利用されている。対する仮名序では、先の和歌の歴史を述べる箇所、柿本人麿と山部赤人のような名人の歌を収録した集として『万葉集』の書名が出ているが、それは過去の集として若干の距離をもって登場しており、真名序の場合ほど『古今集』に直結していない。

真名序にある通り『古今集』が『続万葉集』の段階を経ていたとすれば、どのような経緯が考えられるだろうか。撰者たちは様々な歌を集め、これをいったん『続万葉集』と名づけた。それは『万葉集』に倣い、大量の歌を二十巻に振り分けただけのものであったと考えられる<sup>9)</sup>。しかし寛平期にはすでに『新撰万葉集』があり、そこでは四季や恋の部立が用いられている。それを取り入れるべきではないか。撰者たちはもちろん、『古今集』実現の立役者の一人と目される藤原時平や、醍醐天皇も交えて、方向転換を図るべきという結論に達したのだろう。またその頃、撰者たちのなかで最も位が高く、年長者でもあった紀友則が、病に臥せったという事実も無関係ではあるまい。従兄に代わって撰者の中心人物となった貫之が、より大胆かつ有意義な歌集を目指して、第二次の編纂作業を主導したと思われる。そうすると、『続万葉集』という題が問題になってくる。確かに『万葉集』が偉大な伝統であるというのは議論の余地のない共通理解であったろう。しかし『万葉集』は万葉仮名による和歌集である。そして『新撰万葉集』は仮名で書かれた和歌と漢詩を併置するという、特殊な歌集であった。したがって、仮名による和歌のみを収録した『古今集』には、両者を彷彿とさせるような題はふさわしくないとされたのだろう<sup>10)</sup>。

編纂に関する記述は行政に関わる部分なので、真名序のほうで詳しく扱われていることは納得がいく。一方、集の内容を説明する機能を持った次の一文は、仮名序にのみ掲載されている。

それがなかに、梅を挿頭すよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また、鶴亀につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩・夏草を見てつまを恋ひ、逢

坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ撰ばせたまひける。

先に引いた「しかあるのみにあらず、さざれ石にたとへ……」が歌の常套手段を説明していたのに対し、こちらは集の部立を予告するものとなっている。「梅」「郭公」以下が春・夏・秋・冬、「鶴亀」以下が賀、「秋萩・夏萩」以下が恋、「逢坂山」以下が別離、「くさぐさの歌」が雑、という具合で、それぞれの部立を逐一説明しているわけではないが、大部分の構成を示唆するものである。つまり、真名序が編纂の経緯の説明に紙幅を割いたのに対して、仮名序は編纂の結果について語っているということになる。

最後に、仮名序の末尾に近い次の一文は、『古今集』完成の喜びをこう表現している。

かくこのたび集め撰ばれて、山下水の絶えず、浜の真砂の数多く積もりぬれば、今は、明日香河の瀬になる恨みも消えず、さざれ石の巖となる喜びのみぞあるべき。

これだけたくさんの歌が集まったのだから、今後は歌が衰えるなどということはなく、いつまでも栄えて行くであろうことが喜ばしい、という内容だが、ここでも「浜の真砂」や「明日香河の瀬」など、和歌の表現が巧みに利用されている。真名序では以下の文がこれに対応しているとされるが、趣はかなり異なっている。

淵変じて瀬となる声は、寂々として口を閉ぢ、砂長じて巖と為るの頌は、洋々として耳に満てり。

これは歌に対する時代の姿勢というよりも、醍醐天皇の治世そのものへの評価である。不安をかこつ声がやみ、天皇の繁栄を祈る声が多く聞かれるようになった。いわゆる「延喜の治」への賛美である。そのような平和な世にあって醍醐天皇は伝統再興を望み、『古今集』編纂を命じた、ということになる。仮名序では逆に、『古今集』に多くの秀歌が集められた結果として今後の和歌の繁栄が期待されているので、仮名序のほうが『古今集』という事業に対してあからさまな矜持を抱いている、ということになる。そもそも仮名序では歌、真名序では政治と、主題も異なっている。

#### IV. 「六義」と「歌のさま」

##### 両者の差異

ここまで、『古今集』の両序を三つの部分に分けて比較検討を行ったが、もう一つ残る重要な部分には故意に触れずにきた。それはいわゆる「六義」を扱う箇所である<sup>11)</sup>。この箇所は過去に何度も議論の対象となりながら未だに定説と言えるものはなく、それだけに、仮名

序と真名序の関係性や差異について考察するに当たって、ある程度詳細に論じる必要があると思われる。

六義は、言うまでもなく中国の概念である。それは『詩経』において詩の用途を説く概念として出発し、やがて詩の内容や修辞法を説明するものへと変化した。『古今集』両序はそれぞれ六義に触れているが、その方法は大きく異なっている。

和歌に六義あり。一に曰く、風。二に曰く、賦。三に曰く、比。四に曰く、興。五に曰く、雅。六に曰く、頌。

真名序における六義の説明はこれだけである。「詩」を「和歌」に変えた以外は『詩経』の丸写しと言ってよく、これといった工夫はない。

ここで六義の内容を補足しておく、風は諷刺、賦は比喩を用いない直接表現、比は比喩表現、興は暗喩、雅は政治賛美、そして頌は天への賛美を司っている。賦、比、興が修辞法に関する概念であるのに対し、風、雅、頌は詩の内容を現わす概念と言える。それは漢籍に親しんでいる当時の教養人であれば知っていることなので、真名序では敢えて説明を省いたのだろうか。それにしても、漢詩のための六義がどのようにして和歌の六義に応用されるのか、真名序では曖昧模糊としたままである。

だが仮名序では、それは紙幅を割いて論じられている。六義に関しては、真名序では言及するに留め、詳細は仮名序に譲る、というのが当初からの計画であったのだろうか。

そもそも、歌のさま、六つなり。唐の詩にもかくぞあるべき。その六種の一つには、そへ歌。

仮名序ではこのように六義の議論に入り、続けて「かぞへ歌」「なずらへ歌」「たとへ歌」「ただごと歌」「いはひ歌」を挙げ、さらに範となる歌を一首ずつ掲げている。順を追って見て行こう。

「そへ歌」は、『詩経』の六義で言えば風に当たる。例に挙がっているのは以下の歌である。

難波津に咲くや木の花冬こもり今は春べと咲くや木の花

これは仁徳天皇に対して、皇位につく時期に関してそれとなく意見するための歌であるから、政治批評には違いないが諷刺というほど強烈なものではない。しかしこれを風に当てはめるのはまず自然と言えるだろう。

次の「かぞへ歌」は、『詩経』の六義で言えば賦、つまり比喩を用いない直接表現に相当

する。いや、当たると考えられがちである、と言うのが正しい。というのも例に挙げられているのは次のような歌だからである。

咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずて

冷静に読んでみれば、これは文字通りの「かぞへ歌」、つまり物名を羅列し、数え上げる歌であるであることがわかる。上の歌には「つぐみ」「あぢ」「たづ」など鳥の名が隠され、「いる」が「入る」とも「射る」とも取れる掛詞も盛り込んである。とても賦と呼ぶべき表現方法を追求したものとは思えない。だが仮名序は、「二つには、かぞへ歌」と述べて実際にかぞへ歌を挙げているのだから、何も問題はないということになる。

問題はないはずだが、それでも後世の読者は混乱を隠せない。それは六義の二つ目は賦であり、比喻を用いない直接表現でなければならないと思いついてしまっているからである。それは私たちよりもはるかに紀貫之に近いところにいたはずの古注筆者も同様で、ここにも「この歌、いかにいへるにかあらむ。その心、えがたし」と注をつけ、ことによるとそもそもの説明に誤りがある可能性を指摘している<sup>12)</sup>。

しかしこれは大きな誤解である。これは和歌のための新しい概念の説明であって、六義を和歌に完全に当てはめる試みではないのである。「歌のさま、六つなり」と明言している通り、これは日本の歌の姿についての議論である。「唐の詩にもかくぞあるべき」と筆者は言っている。中国の漢詩にもそのような六つの分類があるが、それはそれとして、ということであろう。つまり仮名序のこの部分は、もちろん六義を参考にし、それをなぞろうとする意図も持っているが、同時に中国経由の伝統をやや遠ざけ、受け売りではない新しい修辞理論を創造しようとする箇所なのである。もっと言えば、仮名序で「歌のさま」を論じる『古今集』を、大序で六義を論じる『詩経』になぞらえようという、大胆な決意の表れであるのかもしれない。

また、「かぞへ歌」が物名の技法と密接に結びついたものであるとするならば、ここで『古今集』の部立に「物名」があることを思い出すにはいられない。その巻十には47首が収録されているが、そのうちの6首は他ならぬ紀貫之の作であり、彼が自分の得意とした遊戯的な技法を、和歌の六つの分類の一つに数えたとしても不思議はないのである。

このあとも「なずらへ歌」「たとへ歌」「ただごと歌」「いはひ歌」が続くが、古注筆者はこれらすべてを疑問視し、よりふさわしい例として別の歌を提案している。このような注釈者の態度はどうも腑に落ちない。『古今集』がその場の思いつきで編まれたような歌集ではなく、宇多天皇と醍醐天皇の二代にわたる文学への情熱、万葉集への関心、漢詩と和歌の融和を通しての日本独自の文学の模索など、長い年月をかけて機が熟し、さらに四人の撰者が度重なる試行錯誤の果てに完成させたものであることは明らかである。そのような集の要石とも言える仮名序に、それほど決定的な不備があるものだろうか。ともかく残る四つの分類

を見てみよう。

「なずらへ歌」は、無理に六義に当てはめるとすれば比、つまり比喩表現となる。「なずらへる歌」なのだから、あながち間違いでもないだろう。例歌は以下。

君に今朝朝の霜のおきていなば恋しきごとに消えやわたらむ

霜が置いてやがて溶けるさまと、恋人が起きてやがて去るさまを重ね合わせているのだから、「なずらへ歌」として見事に及第である。古注が「よくかなへりとも見えず」と待ったをかけ、別の歌を持ち出して来る必然性はない。

次の「たとへ歌」は六義の興、つまり暗喩に相当すると考えられてきた分類である。これも「たとへる歌」であり、「なずらへ歌」同様の一致を期待させる。

わが恋はよむとも尽きじ荒磯海の浜の真砂はよみ尽くすとも

上記がその例だが、六義の興は、ある事物や風景から主題を喚起する方法であり、ここでは「荒磯海」がその景物に相当するだろうか。『古今集』の時代には、「荒磯海」という言葉はまさにこの歌にあるように、真砂の数の尽きぬことを示すことがしばしばあった<sup>13)</sup>。そこに尽きぬ恋心が重ねられており、さらに「よむ」という語が「数える」と「詠む」の両方の意味にかかっているのも、興に相当する概念として「たとへ歌」を提出しているとしても問題はないだろう。ここでも古注は「たとへ歌」が「そへ歌」と混同されているのではないかと詰っているが、「そへ歌」は政治的な意見をそれとなく奉る歌であるから、天皇など目上の相手に向けられた時点で「そへ歌」なのであり、それが同時に「たとへ歌」や「なずらへ歌」としての要素を持っていることは問題にならない。『詩経』でも風は目的、興は表現に関わる分類であるから、混同してしまっているのは注釈者のほうということになる。和歌は詩であり、詩的言語が比喩や暗喩をまったく生み出さないなどということとはあり得ないのである。

五つ目の「ただごと歌」は六義の雅、政治賛美の詩に相当する。例歌は以下。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

もし人が偽らないものであったら、その言葉もずっと心地いいものになるだろうに、というこの歌は、政治賛美とは言い兼ねるが、それでも政治賛美という問題を念頭に置くことで歌の意味を限定することはできる。「いつはり」は人間同士のあいだに発生するものであり、例えば恋人の嘘に傷つく場面を想像したほうが、確かに和歌らしくはある。しかし政治の世界にも虚偽や裏切りはつきものであり、すべての言葉を嘘かもしれないと疑いながら聞

くことは決して気持のいいものではない。そのように解釈してみると、この歌は非常に皮肉な響きを持つことになるし、「そへ歌」の場合よりもはるかに直接的な諷刺となる。

このように「ただごと歌」の場合にも六義の概念との間に距離があるので、古注筆者はもちろん黙っていない。筆者は、偽りのない世の中を望むという歌の内容からこの例歌は「とめ歌」であり、「心さらになはず」として、代案として平兼盛の歌「山桜飽くまで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に」を挙げている。

最後の「いはひ歌」は天への賛美、世の賛美を行う、六義の頌に相当するとされるものである。例歌は以下。

この殿はむべも富みけり三枝のみつばよつばに殿づくりせり

この歌は御殿の立派なさまを讃える歌であるので、古注筆者は世を賛美する歌としては弱いと判断し、「いはひ歌とは見えずなむある」とまたしても切り捨てている。しかしこの歌は、単純に建物の荘厳さを讃えているわけではなく、明らかにその建物の主、つまり天皇の偉大さをことほいでいるわけだから、「いはひ歌」として問題はないはずだ。

さて、以上が仮名序における「歌のさま」の六つの分類である。整理してみると、「そへ歌」「なずらへ歌」「たとへ歌」「いはひ歌」はそれぞれ六義の風、比、興、頌と親和性を持っているが、「かぞへ歌」と賦、「ただごと歌」と雅の間には相当の乖離があることがわかった。それでは、ここから何を導き出すことができるだろうか。

### 差異が意味するもの

仮名序における「歌のさま」は、六義を下敷きとしながらも、より和歌に適した新たなカテゴリーを提案している。もし『古今集』撰者が六義をそのまま和歌のコンテクストに適用させようと望んだのであれば、六義の名称はそのまま用いられたであろう。「そへ歌」「かぞへ歌」以下、新たな名称が挙がっている時点で、その意志はないと見なすべきである。だがそれは後世の読者には必ずしも明確に伝わらなかった。古注筆者も然りである。古注筆者はほとんどすべての「歌のさま」に異議を唱え、最後には「おほよそ、六種に分れむことは、えあるまじきことになむ」と匙を投げてしまう。

このやや無責任な古注筆者がいったい誰であるのかはわかっていない。もちろん、『古今集』成立以後に生きた誰かであり、平兼盛の歌を引用していることから、その歌が作られて以降に古注が書かれたと考えるのが至当である。また古注を書いたのが複数の人間であるという推測も成り立つ。いずれにせよその態度を見るかぎり、古注筆者は和歌の説明のために伝統的な六義の概念を用いることに反発を覚えているように思える。さらに六義の解釈が漢詩の場合と変わっていることにも、強い違和感を抱いているようだ。

このような考え方は、六義を「オリジナル」と捉え、「歌のさま」をその「コピー」と限

定する発想に端を発するものであろう。六義に優位を与え、はじめに漢詩ありきという考えを持っては、「歌のさま」の存在理由を積極的に見出だすことはできないし、ひいては仮名序の真価に触れることもできないだろう。「仮名序にある六義の説明は不出来である」というような見方は少なからずあるが、仮名序が説明しているのは六義ではない。村瀬敏夫や山岸徳平は貫之に漢学の知識が不十分であった可能性を指摘しているが、それとこれとは別問題と捉えてよい<sup>14)</sup>。また「歌のさま」の解釈を難しくしている例歌は後から補入されたものである、という徳原茂実の指摘なども、仮名序に六義の完全な再現を期待するあまりの疑心暗鬼ではないだろうか<sup>15)</sup>。

確かに、もし仮名序が「歌のさま」についてもうすこしつぶさに論じていれば、このような混乱は避けられたかもしれない。何故そのような「六つのさま」が選ばれたのかもわからないし、何が歌の「さま」を規定するのも論じられることはなく、仮名序は例となる歌を一首掲げるのみである。しかし、それこそ仮名序のメッセージでもあったのではないか。『古今集』においていくら序文の存在が重要ではあれ、テキストの中心はあくまで歌であり、歌の力を知らしめることこそが最大の目的である。したがって「歌のさま」についても、ただ歌を以て説明に代えることに意義があるのであって、それを見た読者が各自に思いを馳せ、さらなる歌体の研究にいそしむことを、仮名序は期待しているのだ。歌は開かれた表現であり、そのようなやりとりによってしか発展しないのである。

ではその期待に応える意味でも、試みに六義という前提を捨象し、純粹に「歌のさま」だけを定義しようとすればどうなるだろうか。

まず「そへ歌」は「そへごと」の歌である。つまり遠回しに述べることで、「諷言」という字を当てることもある。対象との距離をとれば必ずから諷刺に近づくこともあるが、政治という前提はない。次の「かぞへ歌」はすでに述べた通り、物名を羅列し、数え上げる歌。「なずらへ歌」と「たとへ歌」の区別は難しいが、「なずらふ」とは「同列に並べる」の意であるから、例歌に拠れば「恋人の去ってゆく様は霜が溶けてゆく様と同じようなものである」ということになる。対する「たとふ」は「共通点のある別の事物をあげて説明すること」であるので、「私の恋心は、まるで砂浜の砂のように尽きないものである」となり、あくまで「恋」が主語であるところに、微妙な差異を認めることができるかもしれない。現代的な説明を試みれば、あるいは前者はメトニミー（換喩）的、後者はメタファー（暗喩）的な表現と言えるだろうか。「ただごと歌」は、「直言」とすればわかりやすい。技巧的な修辭を凝らさぬ歌の意で、例歌もその通りである。最後の「いはひ歌」も、まさに「祝う」歌であり、これ以上の説明は不要だろう。

以上のように、いざ六義との関係性を断ち切ってみると、仮名序の「歌のさま」はあっけないほどすんなりと解釈できる。むろんこの六つの分類があらゆる歌に対応するものではないにしろ、少なくとも一定の精度を持ったカテゴリーとしては機能するように思えるのである。

しかし『古今集』撰者が「歌のさま」を仮名序という歌論の中核と考えていたかと言えば、おそらくそうではないだろう。仮名序の冒頭にあるように、和歌の本質は自然の景物などを通して自らの心のうちを表現するところにある。ましてや和歌においては、心も言葉も自由な結びつきによって詩に表現されるところに意義があるのだから、鹿爪らしい「歌のさま」の分類はあまり有益とは思えない。それでも六義を「歌のさま」に置き換えるという試みがなされたのは何故か。

この問いに関してはいくつかの先行研究がある。例えば石井裕啓は、それが和歌に独特の「比喩のあり方の諸相」を示すためのものであると指摘している<sup>16)</sup>。だがそれぞれの「歌のさま」の厳密な定義が不可能である以上、これが達成されているとは言い難い。鈴木日出男が述べるように、和歌における比喩の技法はすでに十分に発展していたので、それを六義に当てはめようとするのはそもそも無理な話なのである<sup>17)</sup>。つまり漢詩の六義に相当するものは、すでに和歌の中に潜在している。それを見出そうとしたのが「歌のさま」の説明である、と考えるほうがまだしも自然であろう。これは胡潔によって指摘されている点でもある<sup>18)</sup>。こうして作られた六つの「さま」のなかには、六義と相容れるものもあれば、そうでないものもあった。尤海燕によれば、後世の注釈書などでもっとも評価されたのは「風」に対応する「そへ歌」であった。しかし「かぞへ歌」「ただごと歌」「いはひ歌」などは、その後ほとんど取り上げられることがなかったのである<sup>19)</sup>。

だが、もし和歌独自の比喩の発見や、あるいはその紹介がこの箇所意図であったならば、掛詞や歌枕といった、当時すでに十分に認知されていた技法を話題にすればよいはずである。実際、仮名序ではべつの箇所でも、すでにそれらに言及している。そのためには「掛詞こそやまとうたのさまなり」というような明示的な方法ではなく、「松虫の音に友をしのび、高砂・住の江の松も相生のやうに覚え」というような実践的な方法が選ばれていることは前述の通りである。何故なら、これらの比喩表現は完全に和歌独自のものとして意識されていたので、仮初めにも漢詩の六義と比較する必要などないからである。

したがって、言ってみれば危険を承知で六義に対応する「歌のさま」を作りあげた撰者たちの真意は、最終的に次の二点にじぼることができるだろう。まず第一に、和歌の勅撰集という前例のない事業に際して、漢詩の集に付す序文の形をなるべく踏襲することで、和歌にも漢詩同様の権威を与えるということ。そして第二に、六義を模した「歌のさま」を強調することによって、漢詩に親しんでいる読者の注目を和歌にも向けさせることである。つまり、多少ぎこちないものであっても「歌のさま」によって漢詩との親和性を持たせることは、和歌という日本独自の芸術形態に、漢詩漢文に権威を与える公の場において居場所を獲得させるための手段だったのであり、それはまた初の勅撰和歌集の宿命でもあったのである。

## V. 結論と展望

『古今集』の編纂が決まった際、序文の執筆は撰者たちにとって大きな課題であったろう。『懐風藻』以来の伝統を意識しながらも、和歌という仮名による表現を正当化しなければならぬ。結果として、原則として伝統に則った序文である真名序と、より和歌の本質に特化した仮名序とが書かれた。

序文の社会的な役割はさておき、仮名序の真の目的は和歌の価値を担保することであつたらう。それは結果として、仮名序に最初の歌論書としての性格を与えることになる。したがって、修辞理論が重要な側面を担うことになるのだ。アリストテレスの時代、西洋で修辞学と弁論術がレトリックの名の下に熱心に整備され、今日にまで生き残る概念がいくつも誕生したように、仮名序は日本に独自の修辞理論を根付かせようとした。六義を「歌のさま」に置き換えた箇所はこれに加え、さらに和歌と漢詩の親和性を強調するという目的をも併せ持っている。その試みは、少なくとも明瞭さを欠いているという点において必ずしも成功したとは言いがたいが、まさにその理由によって、和歌の独自性に目を向けさせてくれるのである。

本稿の考察から和歌の独自性という問題にさらに踏み込むには、さらに二つの観点からの再考が有意義であると思われる。一つは仮名の問題である。仮名の発生と、そのことが日本語に、ひいては日本人の思想に及ぼした影響には計り知れないものがあり、和歌はもちろん、その和歌を論じる仮名序にとっても、これは大きな前提となる<sup>20)</sup>。そしていま一つは、中国の詩論や詩集を踏まえての検討である。漢詩集の序文や、漢詩における六義の位置づけをより仔細に検討することで、さらに明らかになる和歌や和歌集の特徴があるはずだ<sup>21)</sup>。これらの問題は今後の課題とし、本稿をもってその序論としたい。

## 註

- 1) 本前者の傾向に当てはまるものとしては、例えば菊地靖彦「『万葉集』と紀貫之」（『萬葉集の世界とその展開』白帝社、1998）が挙げられるだろう。一方、後者の傾向に当てはまるものには、神田龍身『紀貫之』（ミネルヴァ書房、2009）がある。ここでは仮名序が詳細に検討されているのに対して、真名序はほとんど言及されない。
- 2) 序文の様々な機能や性質についての研究には、ジェラルド・ジュネットの『スイユ テキストから書物へ』（和泉涼一訳、水声社、2001）がある。ただしそこで扱われているのは西洋の、主として印刷術が発展してからの書物であるので、本稿の内容と直接に結びつけることはできない。
- 3) 大隈和雄『歴史物語と平安文化』『歴史物語講座 第七巻 時代と文化』風間書房、1998。
- 4) 日本書紀の執筆者の問題を中心に考察する文献としては、森博達『日本書紀の謎を解く 述作者は誰か』（中公新書、1999）が挙げられる。
- 5) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』講談社、1998。『古今集』についての文献はかなりの数に上るが、片桐著はその研究史としても有意義である。
- 6) 例えば、本稿で用いている新編日本古典文学全集でも、真名序と仮名序の表現の違いは頭注にま

とめられている。

- 7) 「言の葉」という語がこの形で登場し、なおかつ重要な意味を付加されたのは『古今集』が初めてであり、それ以前の例は見当たらない。『万葉集』には「ことは」を詠んだ歌はあっても、「ことのは」を詠んだものは一首もない。このことから「言の葉」という概念の重要性は明らかであるが、それにもかかわらず、この概念が意味するところに焦点を絞った研究は、まだ充分に行われているとは言い難い。
- 8) しかも在原行平は実際には優れた歌人であり、『古今集』に四首の歌を入集させているのである。行平は政治的に不遇だった青年時代、弟と共に摂津の領地で和歌に熱中し、腕を磨いたと言われる(秋山虔・山中裕編『日本文学の歴史 第3巻 宮廷サロンと才女』角川書店、1967)。また仁和三年(877)に開催された、記録の残っているものとしては最古の歌合である「在民部卿家歌合」の主催者でもあった(泉紀子「歌合の成立」『屏風歌と歌合』和歌文学論集5、風間書房、1995)。要するに、業平ほど伝説的な存在ではないものの、行平も和歌の勃興期を支えた一人であり、貫之も行平には大きな敬意を抱いていたと思われるのである。
- 9) 菊地靖彦「『古今和歌集』の部類と構成」『古今集とその前後』和歌文学論集2、風間書房、1994。
- 10) 小池清治「古今和歌集の二つの謎 仮名序の隠し文字と巻十九雑体冒頭部」(『宇都宮大学国際学部研究論集』第15号、2003、15-22頁)にある推論は本稿のものと同筋で一致するが、醍醐天皇が小池の言うほど『古今集』編纂で積極的な役割を果たしたとは考えにくい。
- 11) 『古今集』序文における六義は「不必要なペダントリー」と片付けられてしまうこともある(目崎徳衛『紀貫之』吉川弘文館、1985、107頁)一方、後段で取り上げるように、近年ではより積極的な意味付けが摸索されている。だが総じて言えば、片桐前掲書に整理された研究史を見てもわかるように、六義の問題は迷走を続けているのである。
- 12) 古注はその名の通りきわめて古い写本にも存在するため、本稿の底本をはじめ、ほとんどの版で本文に盛り込まれている。このため「仮名序」と言えば、古注もそこに含まれるものと認識されている。
- 13) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』笠間書院、1999。
- 14) 藤岡忠美『紀貫之』集英社、1985、および村瀬敏夫『紀貫之』新典社、1987。このような貫之の漢学の能力への疑念は、彼が文章生、つまり漢学の「エリートの卵」になるための試験に合格した証拠がない、という事実に基づいている。しかし、仮に貫之がこの狭き門の突破を試みて敗れたのだとしても、『古今和歌集』完成時には御書所預、つまり宮中の書籍の管理人を務め、後には小内記、大内記という漢文の素養を必要とする職を歴任していることもまた事実である。
- 15) 徳原茂実「古今集仮名序「歌のさま六つ」例歌存疑」『武庫川国文』55号、2002、1-8頁。
- 16) 石井裕啓「古今集仮名序の六義」『和歌文学研究』92号、2006、13-24頁。
- 17) 鈴木日出男「古今集の比喩」『古今和歌集研究集成』第2巻、風間書房、2004。
- 18) 胡潔「「やまとうた」と「からうた」 古今和歌集の序文から見る」『言語文化研究叢書』5号、2006、9-26頁。
- 19) 尤海燕「「風」から「そへ歌」へ 『古今集』仮名序の「そへ歌」を中心に」『和漢比較文学』35号、2005、77-93頁。しかし「風」は六義のなかでも最も政治色の強いものであるため、和歌が本来政治とはパラレルな関係にあるべき表現であることを考えると、それが『古今集』選者の意図とどこまで合致するのかには不安が残る。

- 20) このような仮名の絶対的な重要性については、例えば石川九楊『万葉仮名でよむ「万葉集」』（岩波書店、2011）を参照。
- 21) 本稿といくつかの側面で軌を一にし、また特に示唆に富んでいたのは、胡と尤という中国系の研究者による前掲の論考であった。このことは、両氏が漢詩やその理論について豊富な知識を有していることと無関係ではないだろう。